

# ビワ生育情報

千葉県  
平成30年2月号

## 平成30年1月の気象

平成30年1月の半旬別気象は表1に示した。平均気温は第2及び第4半旬を除く4半旬で平年を下回った。月平均気温は5.8℃で、平年より0.2℃、前年より0.3℃低かった。また、第4半旬を除く5半旬では氷点下を記録し、氷点下日数の月合計は10日で、平年及び前年並みであった。

最低極温は第4半旬を除く5半旬で平年を下回った。暖地園芸研究所ではビワの幼果が寒害を受ける-3.0℃以下を記録した日は4日あり、1月27日には-4.4℃まで下がった。同日には館山測候所でも-4.4℃まで下がり、この冬一番の冷え込みであった。

降水量は第2及び第4半旬を除く4半旬で平年より少なく、第3及び第6半旬では降雨がなかった。月合計は111mmで、平年の123%、前年の168%であった。

日照時間は第4及び第6半旬を除く4半旬で平年を上回った。月合計は193時間で、平年の114%、前年の94%であった。

表1 平成30年1月の気象（暖地園芸研究所）

半旬	気温(℃)			氷点下日数(日)			最低極温(℃)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	5.1	6.8	7.8	1	1.1	0	-0.6	-0.3	2.2
2	7.8	6.3	5.5	1	1.5	2	-1.6	-1.0	-1.6
3	4.8	5.9	4.9	4	1.6	2	-1.4	-1.1	-3.4
4	9.6	5.9	4.8	0	1.5	1	3.6	-1.0	-2.3
5	4.0	5.6	4.4	1	1.9	3	-3.0	-2.0	-2.9
6	3.8	5.8	8.9	3	2.1	1	-4.4	-2.0	-2.0
平均/計/最低値	5.8	6.0	6.1	10	9.7	10	-4.4	-3.3*	-3.4

※：1月の過去30年間の最低極温の平均

表1 (つづき)

半旬	降水量(mm)			日照時間(hr)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年
1	2	12	0	37	28	42
2	70	22	57	33	28	26
3	0	13	1	40	27	30
4	25	12	3	18	26	26
5	14	16	0	33	27	40
6	0	14	6	32	34	42
合計	111	90	66	193	170	206

## 樹及び花房の発育

ビワの開花期は表2に示した。暖地園芸研究所の開花始期は、「楠」が11月5日で、平年より4日早く、前年より1日遅かった。「大房」が11月19日で、平年より6日早く、前年より2日遅かった。「田中」が11月6日で、平年より7日、前年より1日早かった。開花盛期は、「楠」が11月23日で、平年より4日、前年より3日早かった。「大房」が

12月11日で、平年より8日、前年より2日早かった。「田中」が11月22日で、平年より13日早く、前年より11日早かった。開花終期は、「楠」が12月13日で、平年より13日、前年より6日早かった。「大房」が1月16日で、平年より12日早く、前年より7日遅かった。「田中」が12月19日で、平年より21日、前年より8日早かった。

花房の出蕾は平年並みであったが、11月の気温が高かった影響で、開花は平年より早く終了し、肥大した幼果もみられる。ビワの耐寒性は花より幼果の方が低いため、1月下旬の寒波によって寒害を被ったと考えられる。8～10月の日照不足の影響で樹及び花房の生育はやや悪い。また、10月下旬の台風通過後に潮風害を被り、落葉がみられた樹は樹勢の低下が著しい。そのような樹は果房数を少なくし、樹勢の回復を図る。

**表2 ビワの開花期（暖地園芸研究所）**

品 種	開花始期(月.日)			開花盛期(月.日)			開花終期(月.日)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
楠	11. 5	11. 9	11. 4	11.23	11.27	11.26	12.13	12.26	12.19
大 房	11.19	11.25	11.17	12.11	12.19	12.13	1.16	1.28	1. 9
田 中	11. 6	11.13	11. 7	11.22	12. 5	12. 3	12.19	1. 9	12.27

平年：1987年（昭和62年）～2016年（平成28年）の30年間の平均

### 3月の作業

ビワは厳寒期を過ぎて春が近づくと、枝葉の伸長が始まり、果実の肥大が急速に進む。しかし、春先は夜間に冷え込むことがあり、3月中旬頃までは寒波の襲来に注意する。3月になると台木の芽が動き始めるので、接ぎ木は3月中に行う。また、摘果や袋かけは寒波の襲来がなくなった頃から始める。

#### 摘果・袋かけ

摘果・袋かけの作業は、3月以降、寒波の襲来がなくなる頃を見計らって、寒害を受けにくい園から始める。寒害を被った果実は、種子が少なく、形がいびつとなり、成熟前に落果することが多い。袋かけ作業をした後に寒害を被るとその果実が無駄になってしまうので、作業開始が早くなりすぎないように注意が必要である。一方、4月下旬以降まで作業が遅れると、擦れ傷、虫害などで果面が汚くなるので、適期を逃さない様に行う。

標準的な着果程度は1果当たり20枚の葉が必要である。摘房が十分でない樹は最終的な着花房率が60%になるように摘房する。着果房数が多い樹では1果房に1～2果残し、着果房数が少ない樹では収量を確保するために3果以上着生させる。3果以上着生させると、葉枚数が適正でも果実が小さくなることがあるので、着果房数が少ない場合や個数を重視するときのみ着生させるようにする。

#### 接ぎ木

接ぎ木の適期は、台木の芽が動き始める2月下旬～3月中旬であり、天気の安定した時期を選んで行う。気温の低い日に作業すると、接木した苗の活着率が低下する。4月に入ると切り口から樹液の溢出が多くなり、接ぎにくくなるので、3月中に終わらせる。台木は接木部の直径が1.5cm以上のものを用いる。太いものほど活着後の生育は良いが、あまり太いものは取り扱いに不便である。

なお、表の数値は、表示単位未満を四捨五入したため、合計値と内訳の計が一致しない場合がある。

【問合せ先：千葉県農林総合研究センター 暖地園芸研究所 特産果樹研究室 電話0470-22-2961】  
 ※果樹の生育情報は「ちばの農林水産業」の「生育情報」でも御覧いただけます。  
<http://www.pref.chiba.lg.jp/seisan/seiiku/index.html>